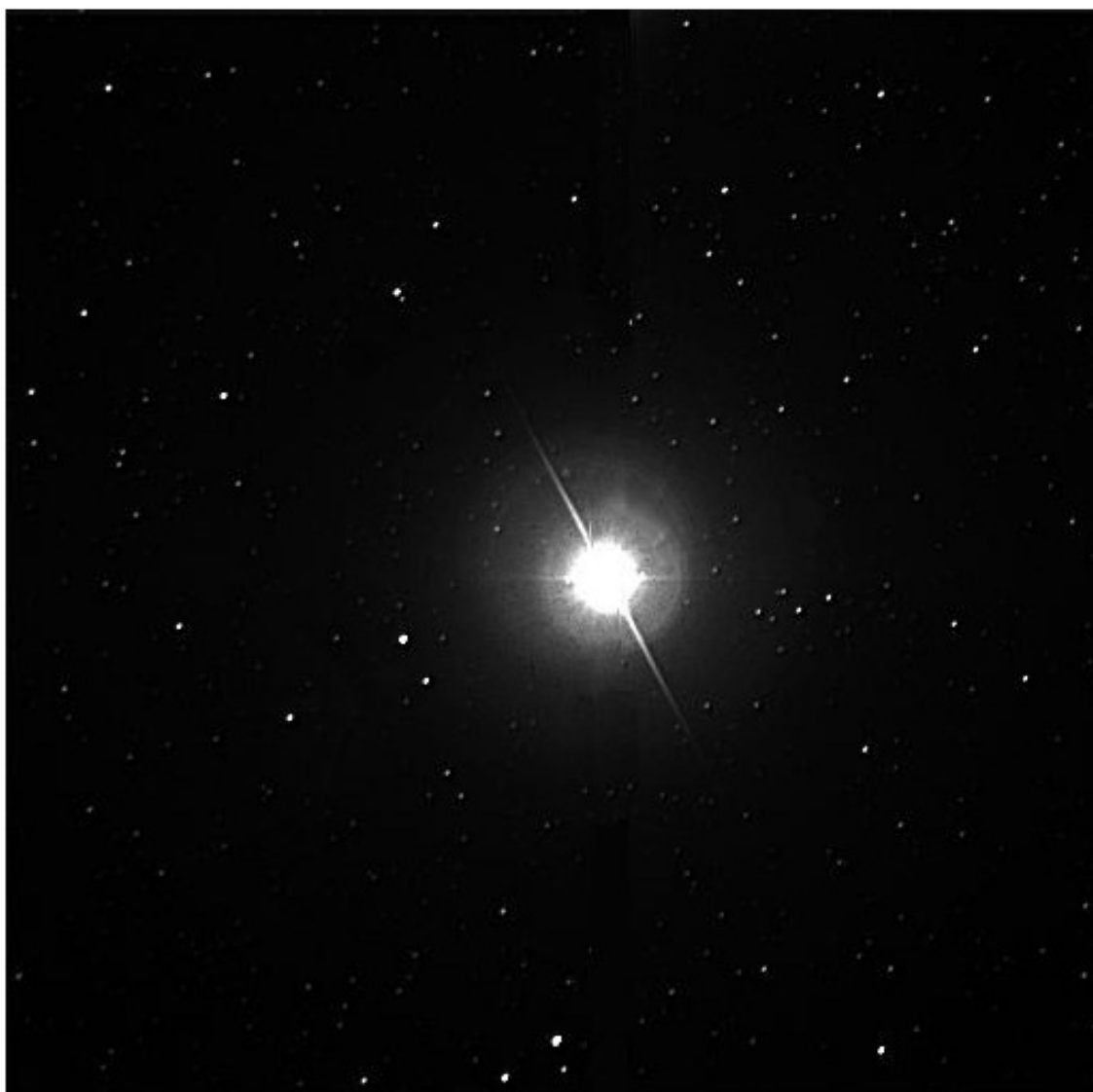


【2014-07-20】 ブルー・ア  
ルタイトルを一杯



b-svaha

私たち一行は、老夫婦のコテージを離れ、サナトリウムへと向かう緩やかなスロープの道を、ゆっくりと辿り始めた。

飯合炊飯だろうか、バーベキューなのだろうか、青い透き通った煙が、キャンプ場のテントから立ち上っている。

こうばしい香りが漂ってくる。

何組かの家族が、食事の準備をしているようだ。

子供も、大人も、年配の人たちもいる。

地球の幸せな家族の風景と、何も変わらないように思える。

私は、さっきまで一緒だった、アキーラとライラのことを思っていた。どこから見ても、二人は、私にとって、最高の理想のカップルに思えた。

幼くして父を失った私には、年老いてなお、相思相愛の相手と一緒にいることのできる幸せを、そうではない母の人生からよく知っていたのだ。

(あのように仲睦まじい夫婦で人生の晩年を迎えられたら、それも、二人とも健康でいられたなら、他に何も望むものはないだろう...)

そんな風に思っていると、そばを歩いていたポニー・C が口を開いた。

「本当に、彼らは素晴らしいカップルですね。あなたがそう感じるのも当然です。

名前の通り、アキーラは、鷲座に魂の源をもち、ライラは琴座に縁をもつスピリットなのでから...。

いわば、二人は二つの星系の融合を具現化した存在なのです。

地球の神話でいえば、織姫と彦星のお二人なのです」

織姫と彦星といえば、互いをいとおしく思うがゆえに、ついには自分の果たすべき本分を怠るようになり、神の怒りによって、一年にたった一度しか会うことを許されなくなったという悲恋の物語だが、本来は、そのような悲劇的なものではなく、この二つの星座の関連性の大きさを、それぞれの特徴を生かして描かれたものだったのかもしれない。

それが、地球の人々のレベルに合わせ、悲劇性を帯びたものへと作りかえられていったのではないだろうか。悲劇性、不幸性がなければ、地球ではリアリティに欠ける、あり得ない話だということになってしまうのだろう。

それほど、地球世界というところは、二元性、二極性の相克を好み、その中にどっぷり息づいているのではないだろうか。

織姫と彦星は、天の川に妨げられ逢引きの自由を断たれたわけだが、年に一度、七夕の日に掛かるデネブという橋を渡って再会できたという。

デネブははくちょう座の恒星であり、この三者によって、夏の大三角という幾何学が描かれるわけだ。で、あるならば、地球に架けられた二元性というトラップを超えるための手掛かりは、この橋にあるのではないだろうか。

そして、それこそが、この三つの星が、神話を通して私たち人類に伝えたかったことではないだろうか...。

こうした思考が、少しずつ、私の想念の湖の上にぷかぷかと浮かび出し、引き寄せられ、次第

にその姿を整えてきた。

いつしか、私の隣にはみどりがいて、私たちは手をつないで歩いていた。

しばらく行くと、街路樹の緑の葉影の先に、サナトリウムの白い建物が見えてきた。

壮麗な、ギリシャの神殿を思わせる美しい造りだった。

白い薔薇のアーチをくぐると、前庭があり、円の中に三角形を入れた形の噴水があった。

最初、遠景から見るよりかなりこぢんまりとした建物だと思ったが、進むにつれ、建物の左右にその全景が姿を見せ始めた。

中央の棟がずっと奥へと続き、そこで左右の棟とクロスする、十字架型の造りだった。

噴水は、その十字架の足元の部分に位置していた。

それは、花壇ではなく、建物と同じ、白い大理石のような石でできていた。

水の中には、いく種類かの藻のような植物が、白い砂のような水底から生えていた。

熱帯魚のような魚たちの中には、球体の、透明なものも静かに動いていた。時に、体の一部が虹色に光るので、生きものであることが分かった。

ポニー・Cによると、それは魚類の一種であり、よく見ると、退化した背骨が白く見えるという。

目を凝らして見ていると、時折、それらしきものが、ちらりと白く光ることがあった。

目も、尾ひれも、背びれもないが、口とえらはある、対流する水のエネルギーを体内で推進力に変換し、好きな方向に泳ぐことができる機能があるらしい。障害物は、コウモリのように超音波を発することかわしているのだという。

そのため、対流のない水には棲まないといわれ、アルタイルの神聖な魚なのだそうだ。

「ようこそ、わたしたちのサナトリウムへ！」

水中の魚たちに、私や女性たちが見入っていると、後ろから男性の声が聞こえた。

ポニー・Cは、彼と言葉を交わし、彼がサナトリウムのスタッフの一員であると教えてくれた。

名をシグニーという彼は、物腰が柔らかく、手足のすらりと伸びた、色白の背の高い男性だった。どこか、中性を感じさせる気高い雰囲気をもっていた。

私たちは、シグニーに導かれ本館の入口に入り、中央の長い廊下を歩き始めた。

両側には、さまざまな大きさや形の部屋が、それぞれの目的と用途に合わせて造られていた。

ベッドばかりの、病棟のような部屋もあれば、マットレスを敷いた体育館のような部屋、栄養士が集まる調理室のような部屋もあり、黒板のある講義室のような部屋もあった。

人や他の姿の存在たちが集っている部屋もあれば、個室のような小さな部屋もあり、誰かが、一人だけポツンと座っていたりもする。中には、牢獄のような分厚い扉で覆われ、小さな窓が鉄柵で仕切られた部屋まであった。

総じて、療養施設というより、さながら、何かの学校のような様相を呈していた。

シグニーによれば、各グループの中で、古代ギリシャのキトンような服装をした人が、サナトリウムのスタッフなのだという。もちろん、彼自身も同様の白い服を着ていた。

やがて、私たちは講義室のような部屋まで来ると、一つのドアから中に入り、アーチ状に何層か並ぶ座席の後ろの方に座して、スタッフらしい女性講師の講義に参加した。

講義は、内容に関する質疑応答の最中であつたらしく、質問に答える講師の声に、誰もが真剣に耳を傾けていた。講義の終わりには、感謝の拍手と、手足をもたない存在たちの発する歓声や音が、鳴り止まぬほどの盛況さだった。

やがて、潮が引くようにして、参加者である聴衆はどこかへ消え、私たちは講壇の講師のところに降りて行った。

ポニー・Cはその人の手を取り、後脚で跪きあいさつを交わすと、私たちに彼女を紹介した。彼女は、このサナトリウムの主管であり、名をデネビーと言った。

デネビーは、優雅さと高貴、威厳を兼ね備えた、まさに、古代神殿の彫像さながらの、大柄な美人だった。

「アルさん、みどりさん、リラさんですね。

お話は、アキーラとライラから聞いています。

医療班の世界へ、ようこそおいでくださいました。

庭園やコテージは、いかがでしたでしょうか」

優しさの中に、しっかりとした芯のある声で、デネビーはそう言った。

(先ほどの、ポニー・Cとの会話でもそうだったが、どうして彼女は、私たちが別れてきたばかりのアキーラとライラのことを知ったのだろうか。ここには、電話やパソコンのようなものは、一切見られないというのに...)

そう訝っていると、

「ここでは、誰もがテレパシーを使ってコミュニケーションできるのです」

と、シグニーが、微笑んで教えてくれた。

私は、この世界の壮大な魅力やアキーラやライラから受けた幸福感、地球とアルタイルの健康に関する考え方の違い、神話から受けたインスピレーションなどについて、感じたままに彼女に答えた。

「よくお気づきになりましたね。

あなたの直感が言うとおりですわ！」

一つ一つ、頷くようにして聞いていたデネビーは、そう言うとさらに続けた。

「この宇宙船の医療班全体が、アルタイル星での健康や医療、つまり、いのちや生き方について、教示、体験、実施する場所ですが、このサナトリウムは、その中枢的役割を担っているところです。

アキーラとライラ、ルアとリラが、それぞれ鷲座と琴座、アルタイルとベガ星を具現化しているように、このサナトリウム自体が、はくちょう座そのものを体現し、わたしとシグニーは、デネブ星とはくちょう座を具象化しています。

つまり、かつては二つに分かれ、融合できない悲しみの中にいたベガとアルタイルを、わたしたちの星座の輝きによって一つに結び付け、分離した、陰陽二極の中にあつた星座を一つに繋ぐことが、わたしたちの星座の役割だったのです」

私たちがここまで来る間にシグニーから受けた説明によれば、十字型の建物の入り口は南西に位置し、その先には、天の河と夏の大三角形をシンボル化した、聖魚の棲む噴水があり、北東には、デネブのまばゆい輝きを背にしたようなデネビーの主管室がある。

この縦の棟には、ビジター用の体験・学習施設があった。

交差する北西の棟には、記念・研究施設があり、南東の棟は、実務・緊急治療施設となっていた。

(なるほど...)

こうしてみれば、サナトリウムの施設のすべてが、白鳥座と夏の大三角形が象徴する意味を具現化すべく創造されているということがわかった。

幾重にも重なり重複する形で、人や物事が集積するようにして、私にこれを暗示してきたということだ。

私たちの抱える、地球上のさまざまな政治、経済、環境、生活、社会良俗上の問題を解決する鍵は、このサナトリウムに、白鳥座であるシグニーやデネビーの中にあるということだ。アキーラやライラの中にあるということだ。

(分離した両極を、離れた場所から一つに繋ぐ別の一つの頂点....)

それが、三角形の一点であり、白鳥座のデネブということなのか....。つまり、二極の世界に平和とバランスをもたらすためには、このまったく別の一点が必要不可欠なのだ。それが、三角形に隠された深遠なる真理...)

ルアとの突然の出会いも、宇宙船での覚醒体験もみどりとの過去世の記憶も、すべてが、この一つの目的に向かって整然と繋がっていることが、いま、はっきりと見える気がした。

私の思念をみんなが理解したのか、デネビーもシグニーも、ポニー・Cも、みどりもリラも、微笑んで頷いていた。

「アルのいまの気づきをみんなで祝福し、星たちに感謝をささげましょう」

デネビーは、そう言うと、両脇のポニー・C、シグニーの手を取り、私と、みどりとりラが、その輪に繋がった。

私たちの想いは、星々の想いと繋がり、空に昇って大三角の光と一つになった。

それはやがて、光の輪となって銀河を包み、私たちの太陽系も、確かにその光に加わった気がした。

感謝の涙が、頬を伝った。

誰もが、キラキラと微笑んで、輝いていた。

【2014-07-20】 ブルー・アルタイルを一杯

<http://p.booklog.jp/book/88207>

著者 : b-svaha

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/b-svaha/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88207>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88207>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ